

令和元年5月9日現在

機関番号：34426

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02087

研究課題名(和文) ツーリズムによる災害復興に関する観光社会学的研究 ―居住者の生活の立場から―

研究課題名(英文) Sociological Study of Tourism on Recovery from Disaster by Tourism

研究代表者

大野 哲也 (Ohno, Tetsuya)

桃山学院大学・社会学部・教授

研究者番号：40598075

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では以下の3点を明らかにした。

第1に、災害復興は単に建物やインフラを再建し、地域住民を「震災前」の状態に戻すといった単純なものではなく、災害の経験を含み込んだ創造的復興を目指さなくてはならないということである。第2に、その際に、世界各国から訪れる災害ボランティアなどと地域住民が新たな連帯を生成する可能性を有する。この新たな繋がりがこそ、創造的復興に重要な意味を持つ。第3に、この新たな人間関係は、「ガイドブック」「支援物資」などのモノも含めたネットワークによってつくられ維持されている。つまり、創造的復興には単に人という社会資本だけでなく、モノという物質が大きな役割を果たすのである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の目的は、大規模災害に見舞われた地域社会がそこからの復興を目指すとき、ツーリズムはいかにそれに貢献できるかを考察することであった。本研究が事例としたのは、2015年に大震災に見舞われたネパールのパタン地区である。

本研究で明らかとしたのは、復興とは単に「震災前」の状態に戻すのではなく、震災の経験も含めた新たな地域社会をつくるのが重要で、その際に「災害ボランティア」というような社会資本や救援物資という「モノ」が重要な働きをするということである。

研究成果の概要(英文)： The following points became clear in this research.

First, recovery from disaster is not simply a matter of rebuilding houses and infrastructure, and returning local residents to a pre-quake state, but must aim for a creative-reconstruction that includes the experience of the disaster. That's what it means. Second, at that time, it has the possibility of creating new solidarity with local residents and disaster-volunteers coming from all over the world. Only this new connection has an important meaning for creative-reconstruction. Third, this new relationship is created and maintained by a network that includes things such as "guidebooks" and "support supplies". In other words, not only the social capital of people, but also the substance of things plays a major role in creative reconstruction.

研究分野：社会学

キーワード：災害復興 ツーリズム ネパール アクターネットワーク

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

大規模災害が頻発している現代世界において、そこからの復興をいかに成し遂げていくかが、国家と被災地域の喫緊の課題となっている。しかもそれは、世界各地から瞬時にNPO・NGO・国際機関のレスキュー隊や災害ボランティアが駆けつけ、長期間にわたり当該地域と関わる状況が生起している現代では、もはや国家や被災地域だけの問題や枠組みを超えて、グローバルな視点から取り組まなければならないテーマになった。まして、被災地に全人類の共有財産である世界遺産が含まれている場合であれば、なおさら復興を達成するための手法の内実が問われてくる。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、2015年に大震災に見舞われたネパールのカトマンズ盆地パタン地区を事例として、観光が災害復興に果たす役割について、アクターネットワーク理論という視点から検討することにある。

大規模災害から復興するプロセスで、観光を活用する手法が一般化している。だが、そこでは観光産業に関連する者だけに富が集中するという弊害が起こり、観光産業に関与できない地域住民にとっては、やってくる観光客は地域の住環境を悪化させる迷惑な存在でしかないというジレンマが生じている。また、負の記憶を想起させる震災遺構を観光資源化することに対する反発もある。こうしたことにどう折り合いをつけ、地域復興を目指すべきかが、今問われている。

そこで本研究では、人と人をつなぐアイテムとしてのガイドブックに焦点を当てて、「災害からの復興」と「観光」と「地域住民の生活の論理」の3つの視点を関連づけながら、地域社会の再構築について検討する。そして、大規模災害からの復興における、手段としての観光の新たな貢献可能性を提示する。

### 3. 研究の方法

1年目：災害復興における観光学の理論を整理するために先行研究をまとめるとともに、カトマンズ・パタン地区、神戸、東日本、東京などで調査を行う。

2年目： の調査を継続しつつ、 の成果と宮城県気仙沼市(2013～)とカトマンズ(2004～)で行って来た研究データを比較検討する。またカトマンズ、スマトラ、四川、日本各地で調査を行う。

3年目： と の調査を継続し、得られたデータを整理しつつ、ガイドブックの表象の変化を軸に研究を進める。そして地域コミュニティの生活の論理をもとに、災害復興について、観光学の立場から連帯に関する新たな知見を導出し、論文や学会発表をとおして発信していく。

### 4. 研究成果

災害復興を目指す被災地域は、現在ツーリズムを活用する機会が多い。そのとき、重要な「アイテム」となるのがガイドブックである。災害ボランティアも観光客もガイドブックを参照していることが多いからだ。そして、本研究によってガイドブックは、単に、観光客と現地社会の観光に携わっている人とを結びつけるという以上の機能を果たしていることが明らかとなった。ガイドブックが仲介して新たな人間関係一時には観光業とは関係のない人たちが構築されるという事象がみられた。こうして出来上がったネットワークによって新たな社会関係資本が構築され、それがデイケアセンターの設立、ボランティア活動の活発化、土産物屋の売り上げアップなどに結びついていた。

なかでもデイケアセンターは本研究の象徴的な事例なので以下で概略を述べたい。

震災から約2ヶ月後に申請者自身が、支援物資としてテント、寝袋、浄水器を調査地(パタン市内のある街区)に届けた。それを地域の人々、とくに自宅に戻れずに路上で避難生活を強いられていた高齢者がシェルターとして利用しはじめた。この困難な状態を知った日本の大学の研究者(申請者の友人)が、私費を投じて8畳ほどのプレハブハウスを寄贈した。これが当該街区にはそれまでなかったデイケアセンターとして機能して、現在でも地域社会の人々に活用されている。そしてデイケアセンターで人々を日常的にサポートしているのは、ネパールで活動している日本人ボランティアなのである。そしてその日本人ボランティアは、他の日本人ボランティアとつながっており、その日本人ボランティアはガイドブックに掲載されている日本人が経営する土産物屋に自身が開発した商品を納入しているのである。そしてこの土産物屋はガイドブックに掲載されることによって、震災後に売り上げを大きく伸ばしている。もちろん、それに一役買っているのは日本人ボランティアが開発した新商品なのである。こうして、当該街区は、震災以前の社会を再創造するのではなく、震災の経験をも含み込んだ「創造的復興」を果たしつつある。

つまり、ネットワークとは単に人と人のネットワークを指すのではなく、テントやガイドブックというようなモノも含めたネットワークなのである。そしてそれらのモノが仲介して人的ネットワークが構築される。さらにこれらのネットワークは、モノや人を巻き込みながら日々更新されている。こうした人とモノが織りなすネットワークが、災害復興に大きな役割を果たしていることが明らかになった。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

[単著]

1. 大野 哲也、2018「災害復興とツーリズム(2・完) —ネパールの世界遺産とアクターネットワーク理論—」『桐蔭論叢 第38号』、桐蔭横浜大学、pp.57-72、<https://toin.repo.nii.ac.jp/>。
2. 大野 哲也、2017、「災害復興とツーリズム(1) —ネパールの世界遺産とアクターネットワーク理論—」『桐蔭論叢 第36号』、桐蔭横浜大学、pp.139-148、<https://toin.repo.nii.ac.jp/>。

〔学会発表〕(計3件)

[単独]

1. 大野 哲也、2017、「災害復興と環境保護 —ネパール地震を事例として—」環境社会学会第56回大会、明治大学。
2. 大野 哲也、2017、「災害復興とフィールドワーク —ネパール・パタンの事例から—」、日本社会学会第90回大会、東京大学。
3. 大野 哲也、2017、「災害復興とツーリズム —ネパール大地震を事例にして—」、観光学術学会第6回大会、神戸山手大学。

〔図書〕(計2件)

[共著]

1. 大野 哲也、2018、「ボランティア活動」『実践で学ぶ!学生の社会貢献 —スポーツとボランティアでつながる—』、成文堂、共著(今泉隆裕)、全330p、担当部分:第1章(pp.18-26)、共著者:田中暢子、松本格之祐、吉田勝光ほか計27名。

[単著]

2. 大野 哲也、2019、「「人跡未踏の地」なき時代の冒険」『冒険と探検の近代日本』、せりか書房、全289p、担当部分:第十章(pp.240-244)、共著者:鈴木康史、高嶋航ほか計11名。

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年:  
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年:  
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等 なし

## 6. 研究組織

(1)研究分担者 なし

研究分担者氏名:

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者 なし

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。